

情報システム学会 第2回 研究発表大会 プログラム

同時開催ワークショップ:「産業界から論文発表を促進するために」E会場:7号館 7F-771

受付開始: 9:30

合同行事 会場:7号館 3F-731

大会委員長 挨拶: 10:00 ~ 10:05

大会開催校記念講演: 10:05 ~ 10:35

「人間中心のCIOのベストプラクティス」

櫻井 通晴(専修大学 経営学部教授)

情報システム学会会長挨拶: 12:50 ~ 13:20

「これからの企業におけるCSRのあり方」

北城 格太郎(日本IBM会長、経済同友会代表幹事)

特別講演: 13:20 ~ 14:50

「社会システム・デザインとは何かー先端課題解決へのアプローチ(仮題)」

横山 禎徳(社会システム・デザイナー)

懇親会 会場 1号館 8F8A 会議室 18:00 ~ 19:30

研究発表会 発表は、質疑応答を含め1件あたり40分です。

「モデルと方法論」のセッションは、午後のセッションでは2つの会場に分かれて頂きます。発表終了後の全体討論はH1会場で行います。「情報システムと教育」のセッションは発表を1件あたり30分で行い、質疑応答は全体討論の時間に行います。

セッション:「モデルと方法論」

H1会場1:2号館 206

午前の部 10:40 ~ 12:00

MDL-01:「エンティティの状態の正規化に関する考察」

Alexis Nanou(東京国際大学・商学研究科)、

佐藤英人(東京国際大学・商学部情報システム学科)

【概要】これまでの上流工程分析ではエンティティとプロセスのCRUD図が使われてきたが、最近はより厳密な記述としてエンティティの状態図が使われるようになってきている。しかし、状態については人によってとらえ方が異なっているのが現状である。そこで、我々は、状態遷移を引き起こすイベントの単位を明確にすると共に、エンティティの固有の状態と導出状態(派生状態)を区別して、状態のとらえ方に客観性を持たせることを追求した。

MDL-02:「モノ・コト分析実践のためのパターン言語」

河合昭男（有限会社 オブジェクトデザイン研究所）

【概要】前回発表論文（C-01）「独立エンティティと関連クラスによるドメイン・モデル」の内容を基に、ドメイン・モデリングの実践方法をモノ・コト分析の視点でパターン言語としてまとめた。エンティティ系のオブジェクトをステレオタイプ《mono》、イベント系のオブジェクトをステレオタイプ《koto》で表し、読み書きの容易なドメイン・モデリングの実践方法を示す。

午後の部 I 15:00 ～ 16:20

MDL-03：「システムモデリングのアフォーダンス的アプローチについて」

増澤洋一（千葉工業大学・経営情報科学科）

【概要】情報システム的设计・構築にむけてアフォーダンス（環境情報、生態心理学）理論からのアプローチを試みる。具体的には、まず自然言語で表記された業務マニュアルをUMLなどのモデリング言語に変換する手法（構造化マニュアル分析・設計技法：SMAD）の実務適用を通じて発見された問題点を検討した。それによって、非構造的な業務の分析に何があることがわかった。そこで環境情報学的な枠組みによってこの問題を解決することを試みる程度の成果を得た。

MDL-04：「ハードウェア性能をフルに生かす処理構造の例－未知数のメモリ型 DBMS」

福市良次（有限会社ポプラ）

【概要】ベンチャ企業等より幾つかのメモリ型 DBMS（※）が提案されている。これらに共通した理念「CPUとメモリ資源をバランスよく活用する処理構造」が、極めて安定したコスト・パフォーマンス向上をもたらしている実例を示し、（1）普遍性の高い技術コンセプトたり得ること、（2）メモリ上での処理の柔軟性は処理目的に合わせた様々なメモリ型DBMSの出現が期待されること、を述べる。

（※）メモリ上でのアクセス処理を前提として構造設計された DBMS

午後の部 II(1) 16:30 ～ 17:50

MDL-05：「要件定義・ビジネスモデル化方法の一考察と挙動指向アプローチの提案」

溝口徹夫（法政大学・情報科学部）

【概要】情報システム開発における上流工程としての要件定義やビジネスモデル化の重要性は言うまでもない。これに関して種々の側面の方法や主張が存在するが、十分に理解することが困難である。そこで、課題領域を取り上げ、整理することを行った。特にその中で、ユーザ(あるいはステークホルダ)とシステムアナリストの間のコミュニケーションの手段として「挙動(Behavior)指向」のビジネスモデル化と要件の定義方法を提案する。ただし、この方法は実務上で検証された訳ではない。

全員討論

H2 会場：2 号館 207

午後の部 I 15:00 ～ 16:20

MDL-06 : 「システム開発における XML の効果的な活用に関する検討」

前田和昭 (中部大学・経営情報学部)

【概要】ここ数年来、データを記述する形式として XML が注目され、Web を中心に製品開発の現場で積極的な利用が進んできている。本発表では、逆エンジニアリングツールと、コンパイラのフロントエンドを開発するときに XML を利用した経験をふまえ、プラットフォーム、プログラミング言語、ライブラリ、ツールなどの観点から、システム開発で XML を効果的に活用することについて検討する。

MDL-07 : 「単一ファイルにのみ事実を記録することによるシステム安定の手法」

堀田正隆 (株式会社プロ・アクシス)

【概要】企業の情報システムは、種々の業務を扱うようになり益々複雑化の度合いを増している。それに伴ってシステム構築の困難性は増し、失敗の確率も高まっているのが現状と言える。本論文は業務の独立性を完全に維持し、新たな業務がシステム化対象として加わっても全く支障なく追加可能にする手法を提示するものである。根幹をなすアイデアは、「事実の一つのファイルにのみ記録する」である。ファイル間の関連性を完全に断つことにより、自由に対象業務を積み重ねることを可能にする試みである。なお、今回の論文は第一回研究発表大会において発表した「履歴記録方式を適用した企業情報安定化アルゴリズム」を基に、より直截な内容としたものである。

午後の部Ⅱ(2) 16:30 ~ 17:50

MDL-08 : 「概念モデル化における暗黙値と常識共有の要件」

堀内 一 (東京国際大学・商学部情報システム学科)

【概要】企業間連携やセマンチック Web の実現には、意味共有手段としての概念モデルの共有が不可欠となる。しかし、概念モデル化は、とくにモデル制作者の立場や関心事に偏る特性をもつ。本稿では、概念モデルの要件とそれを支援する仕組みについて、これまでなされた標準化などを概括しながら、その要件を整理してみたい。また、著者らが ISO/IEC JTC1 SC32 で進めている ISO/IEC19763 規格 (メタモデル相互運用枠組み) についても述べる。

セッション : 「情報システムと教育」

G 会場 : 2 号館 201

午前の部 10:40 ~ 12:00

EDU-01 : 「IT 技術者の人間力醸成についてのホリスティックアプローチとその成果

ープロセス改善活動を通じたパーソナルな価値観の追求ー」

関 弘充 (富士通株式会社マーケティング本部)

【概要】情報システム開発において、高品質等の組織目標を達成するためにはプロセス改善が必須になる。このプロセス改善を効果的に推進するためにはその根源となる人間力への着眼が重要である。本論文においては「人間力の醸成」を主目的として IT 技術者向けに実施した教育講座・セミナーのアンケート、コンサル結果等をホリスティックな観点で分析、考察することにより、人間力を醸成するための思

考パターン、価値観等について論述する。

EDU-02：「IT企業のフィールドSEに期待される教育要件」

杉浦 充、青木美代子（株）日立インフォメーションアカデミー）

【概要】IT人材の養成が強く叫ばれている、現場のSEに対して要求されるスキルは、純技術的なもののみではなく、きわめて人間系、殊にコミュニケーションスキルが最重要である。その背景並びにソリューションとしてのカリキュラム案の提示とその実施評価事例を述べる。

EDU-03：「高度IT人材育成のための産学間の相互理解促進策」

掛下哲郎（佐賀大学・理工学部）

【概要】我が国が必要としている高度なIT人材を育成するためには、産業界が保有している実務経験と大学等が得意とする原理・原則を有機的に統合する必要がある。現状では、産学それぞれが独立に改善努力を行なっているが、相互理解や連携は不十分である。この問題に対処するために、各種IT人材に必要な知識・スキルレベルの調査・分析やアクレディテーション審査における産学連携等を第一ステップとする相互理解促進策を提案する。

午後の部Ⅰ 15:00 ～ 16:00

EDU-04：「初等教育における情報教育について」

島田由美子（多摩大学）

【概要】社会の高度情報化への進展を受けて、教育における情報化も、確実に進展してきている。しかし、校務のIT化、ハード面における充実に比して、子供たち自身の情報リテラシーの獲得といった点に絞ってかんがみると、社会の進展速度に比べて、必ずしも十分な進展は見られない。現在は、各学校に任されている、初等教育における情報教育について、日常生活を送る上でのデジタルデバイドを作らない、ということを念頭に置いたカリキュラムの一例を考えてみることにした。

EDU-05：「高等学校における教科「情報」に関する教育の現状」

高木義和、佐々木桐子（新潟国際情報大学）

【概要】高校に教科「情報」が導入されて4年目に入り、指導内容も安定してきたと思われることから、現在行われている教科「情報」の現状を、新潟県内の高等学校を対象に調査を実施した。その結果、普通科では情報Aを1年時に通年で教えている場合が多く、商業科・工業科では既存の情報関連の専門科目で代替している場合が多かった。教員の基礎免許は数学と商業が多く、基礎免許が情報の教員は少数であった。また、教科書は情報の概念を広範囲にわたり扱っているため使用頻度は低いようであった。

午後の部Ⅱ 16:10 ～ 17:50

EDU-06：「普通高校における教科「情報」教育の現状と課題」

竹村憲郎（専修大学・経営学部）

【概要】平成 15 年度から普通高校に導入された教科「情報」の教育は、学習指導要領の理念とは裏腹に、現場レベルでは多様な問題をはらみながら、実施されている。本報告は、平成 15 年 9 月と平成 17 年 11 月に実施した普通高校に対するアンケート調査の結果に基づいて、教科「情報」教育の現状と課題を紹介する。ここで特に取り上げる項目は、「情報」開講科目の推移、情報担当教員の意識、大学入試への「情報」の導入などである。

EDU-07 : 「大学における産業界と連携した情報システム演習の取り組み」

松永賢次、飯田周作、小林隆、綿貫理明（専修大学・ネットワーク情報学部）

【概要】専修大学ネットワーク情報学部ネットワークシステムコースでは、情報システムに関連する多くの講義を持ち、演習科目で情報システムを構築する実践能力を養成している。専任教員のみで担当していた演習科目に、産業界の協力を得て、いくつかの協同指導演習を実施した。本報告では、その演習の内容及びその演習によって大学専任教員のみが指導していたときと比べてどのような学習効果が学生に現れているのか紹介するとともに、産業界との連携教育の課題について述べる。

全員討論

セッション：「社会と情報システム」 A 会場：7 号館 6F-761

午前の部：10:40 ～ 12:00

SOC-01 : 「グローバル・アライアンス（GA）研究会の活動報告 “GA に必要な考え方”」

榎本健吾（インサイト・コンサルティング）

【概要】ICT 業界におけるグローバル展開は一般的になりつつある反面、オフショアリングにおける品質、コスト、時間の各要素においてビジネス的に厳しい状況が顕在化するようになってきました。そのため、より低コストの人材を求めて新興国へ目を向けたり、逆に沖縄などの国内地方に目を向けて開発拠点の分散化を図る企業も出てきました。一方で、海外人材から見る日本市場の魅力はアライアンス戦略の不明確さや報酬面で徐々に薄れつつあります。本研究会では、グローバルアライアンスの現状を踏まえて、アライアンスの成功と強化に必要な要素は何かを人材マネジメントの視点から浮かび上がらせ、産業界への還元を試みます。今年は中間報告と位置づけて、活動経過報告を致します。

SOC-02 : 「ユーザ参加型の著作権管理システム」

芦田良貴（早稲田大学）

【概要】従来の著作権管理システムは著作権者のためのシステムであった。そのため、行き過ぎた著作権保護に対する批判がユーザ側から提起されてきた。今では、BLOG や SNS が一般に広く普及し、ユーザ側からの情報発信が普遍化している。しかし、一部の動画サイトなどでは、他人の著作物を勝手にアップロードするユーザが跡を絶たず、これも問題化している。本論では、このような矛盾を解決する画期的なソリューションを提示する。

午後の部Ⅰ 15:00 ～ 16:20

SOC-03：「行政組織における集団意思決定過程の分析と政策形成の課題」

高木昭美（早稲田大学 大学院社会科学研究所）

【概要】本研究では、行政組織、特に都道府県における意思決定過程について、意思決定論の観点から、具体的な事例に則した分析を行っている。すなわち、知事許可が必要な事案の取り扱いをめぐって、これを担当する課の職員の意見（選好構造）が異なる場合に、課としての組織的な意思決定をする方法と問題点について、意思決定論的立場から記号モデルを用いて行政組織の意思決定のロジックを抽出している。

SOC-04：「中心市街地における協働プラットフォームデザイン」

梅嶋真樹（慶應義塾大学 大学院政策メディア研究科）

【概要】インセンティブとして鉄道料金の消費者への還元はダイレクトメールと比較して平均 5 倍程度の来店誘発効果を生むことがあきらかになった。我々は 2003 年より従来顧客囲い込みを主目的に小売店が導入してきた顧客カードを中心市街地における小売店の協働の再活性化に利用するモデルをデザインしてきた。本発表における主張は、大手鉄道会社の協力を得て実施した実証実験の結果である。

午後の部Ⅱ 16:30 ～ 17:50

SOC-05：「情報システムの共同処理化への作業課題

— 東京都多摩地域の共同処理事例を中心に —

大谷二郎（日野市役所市民部七生支所）

【概要】全国の市町村は、いわゆる平成の合併により約 3200 団体から 1800 団体に減少した。合併によるシステム統合は、情報システム統合の一形態に分類されるが、合併による統合以外に、複数の市町村で情報システム開発・運用（共同処理）による統合も存在する。東京都多摩地域の共同処理事例を中心に、システム構築、運用の課題、留意点及び特徴を市町村単独処理との比較をとおして、エンドユーザー部門の視点からを整理した。

SOC-06：「情報市場と経済的意思決定」

河合勝彦（名古屋市立大学 大学院経済学研究科）

【概要】「市場」の最大の機能とは、社会に偏在する情報や知識を「価格」というシグナルで集約することであると伝統的経済学は教える。この市場の機能を、IT の力によって増幅させ、より積極的に利用しようとするものが、「未来の予測」を株式に見立てて売買をおこなう「情報市場(Information Market)」である。本稿は、この情報市場を特に日本経済における意思決定問題（経済政策、経営問題）に活用する方法について考察し、その将来性と問題点について議論する。

セッション：「企業システム」 B会場：7号館 6F-762

午前の部：10:40 ～ 12:00

ENP-01：「現場に適した日程計画システムの構築について」

市来寄治¹、志村和彦¹、矢野浩二²、高宮智²、道用大介³、山本伸幸¹、金沢孝¹

¹慶應義塾大学大学院理工学研究科、²味の素株式会社、³青山学院大学理工学部

【概要】近年、製造業においては、ニーズの多様化にともなう品種数の増加や頻繁な需要変動などが起こっている。本研究で対象とした工場の製造現場でも、このような状況に対応するために都度日程計画を変更する必要に迫られているが、その際に段取替えや生産のキャパシティなどの制約条件を考慮しながら、過去の経験などを頼りに計画しており、多大な労力がかかっていた。このような状況を、情報システムを用いて改善するにあたり、どのような観点でどのように進めるかについて、実践の結果をもとに考察する。

ENP-02：「現場主導型システム構築プロセス：

～電子部品組立工場の進捗管理システムにおけるケーススタディ～」

道用大介¹、市来寄治²、山本伸幸²、高野武彦³、金沢孝²

(¹青山学院大学理工学部、²慶應義塾大学理工学部、³ミスズ工業株式会社)

【概要】生産現場の管理者や計画者には様々な情報が必要であるが、その情報は現場担当者によって手作業で作られている場合も多い。本研究では、生産現場で Microsoft Excel がよく用いられていることから、開発言語に Microsoft Excel VBA を用いることによって現場担当者とシステム開発担当者との意思疎通がスムーズになり、現場主導で継続的改善を行いながらユーザ視点のシステムを構築した事例を紹介する。

午後の部 I 15:00 ～ 16:20

ENP-03：「加工食品工場に於けるトレーサビリティシステムの構築」

高山 勇（キューピー（株））

【概要】食品の安全性を担保し消費者の安心を得ようとする目的でトレーサビリティシステムを導入する企業が増えている。トレーサビリティは製品から使用原料を遡及するトレースバックと使用原料から生産履歴、製品出荷先と追跡するトレースフォワードがある。しかし本来、安全な食品を製造する為に事故未然防止システムを構築し、その作業履歴データを保存して、消費者からの問い合わせに迅速に答えたり、使用原料でクレームが発生した場合、生産履歴、出荷履歴から迅速に範囲を限定し、被害を最小限に食い止める事が重要である。10 数年かけて自社開発を行い実績のあるシステムを発表する。

ENP-04：「建設分野におけるライフサイクルデータマネジメントシステム」

辻原志朗（LCDM フォーラム）

【概要】ライフサイクルデータマネジメント（以下、LCDM という）は、対象物の生産過程のみならず、完成後の維持管理などを含めたライフサイクル全体にわたるデータ共有・システム統合の実現を目指す

概念の総称である。LCDM フォーラムでは、建設分野をターゲットとして、この概念を実現するためのメタデータを活用した情報基盤の検討を進めている。本発表では、その取り組み内容、情報基盤である LCDM 流通基盤の基本仕様、課題等について発表する。

午後の部Ⅱ 16:30 ～ 17:50

ENP-05 : 「製品ライフサイクル管理実現のための情報共有基盤」

菅又久直 (次世代電子商取引推進協議会)

【概要】食品の安全危惧、情報機器や家電製品の不具合、環境負荷物質の漏洩等、日々の生活を脅かすリスクを軽減させるには、製品の製造・流通・保守・リサイクル全般にわたるライフサイクル管理が必須でありながら、それを実現できる事業者間の情報共有への取り組みは緒に着いたばかりである。当発表では、製品ライフサイクル管理のための情報モデルの試作と情報共有のためのメタデータ管理の仕組みにつき報告する。

ENP-06 : 「高可用性グリッドシステムのノード配置に関する研究」

山田博之 (北海道大学 大学院情報科学研究科)

【概要】社会を担う情報システムは、重度な障害に対してもシステムが稼働し続けることが求められる。このような高可用性を実現しうるグリッドシステムは、システム内に構成される大多数のノードが適切に配置されていなければ高可用性を実現できない。本研究では、高可用性グリッドシステムのノード配置を検討するために、高可用性を持つシステムのモデル化および、可用性の指標であるシステムの稼働率を計算するためのシミュレーション手法を提案する。そして、高可用性グリッドシステムのノード配置について、前記のシミュレーション手法を用いて検討する。

セッション : 「セマンチックスと Web システム」 C 会場 : 7 号館 6F-763

午前の部 : 10:40 ～ 12:00

SWS-01 : 「領域オントロジー構築支援環境を用いたオントロジー搭載型検索システムの提案と評価」

森田武史¹, 小野穰¹, 洪潤基¹, 川村正則², 小出誠二², 山口高平¹

(¹慶應義塾大学、²(株) ギャラクシーエクスプレス)

【概要】本研究では、オントロジー搭載型検索システム及び領域オントロジーを半自動構築可能なツールである DODDLE-OWL を提案する。DODDLE-OWL により領域オントロジー構築コストを削減する。領域オントロジーを用いた絞込および拡大検索機能を検索システムに導入し、検索精度を向上させる。ケーススタディとして、DODDLE-OWL を用いてロケット運用オントロジーを構築する。また、ロケット運用オントロジーを用いた文書検索実験及びその評価について述べる。

SWS-02 : 「オントロジーに基づく Web アプリケーション構築と評価」

近藤恵一，森田武史，山口高平，和泉憲明，橋田浩一
(慶應義塾大学・大学院理工学研究科)

【概要】オントロジーを基にした Web アプリケーション開発手法を提案する。ビジネスプロセス、ドメイン構造、法規の 3 つの側面を捉えたビジネスオントロジーを構築し、ソフトウェアシステムのユーザーと開発者との開発における共通理解を促す。対象ドメインのモデルをオントロジーにより表現し、設計仕様としての記述力不足を Web アプリケーションの 3 層構造に基づいたモデル、Web プロセス定義を用いて補う。提案手法を適用した実験により、本手法はユーザーと開発者の共通理解に有用であることを確かめた。

午後の部 I 15:00 ~ 16:20

SWS-03 : 「Web-log を活用した分散デジタルアーカイブと意味検索システムの試み」
グロマン・ヒロスケ (Telecommuting-Lab. / Portside Station Ltd)

【概要】すっかり社会に定着した感のある Web-log は、インターネット上に個別のアドレスを持ちトラックバックなど標準化された相互参照機構を持っているため、これらのを上手に連携させることにより、分散したサーバに散らばる様々な知識を有機的に結びつけた仮想データベースを想定することができる。それに加え強力な分散意味検索機構を用意することにより、人と人を結びつけ、知識を有機的に活用するための、業務中心の分散ナレッジベースを実現する試みを紹介する。

SWS-04 : 「ユーザグループによるユーザ文書の生成」

平井航一，辻将悟，山本喜一 (慶應義塾大学・大学院理工学研究科)

【概要】チュータ，ウィザード，ヘルプなどのアプリケーションのユーザ文書を，ユーザからの要求に応じてオンラインドキュメントとして動的に生成，表示するためのフレームワークを提案し，OpenOffice.org の Calc を例に実現したシステムを紹介する。ドキュメントの要素の記述を集めたファクトベースの定義と作成，ファクトベースに基づくドキュメント生成と表示方式を述べる。このアプローチを用いることによって，ユーザにとっては，自分のスキルレベルに応じて適切な分量のドキュメントを得ることができ，アプリケーションのドキュメント開発者にとっては，アプリケーション開発の初期段階からドキュメントの開発を同時並行的に行うことができるようになる。

午後の部 II 16:30 ~ 17:50

SWS-05 : 「オントロジーによる技術・技能の組織的蓄積のサポートについて」
岡部雅夫 (東京電力システム企画部)

【概要】昨今、技術・技能の継承が問題視され、とりわけ匠の世界に近い一部熟練工のみの持つ技術・技術の消失がクローズアップされている。ただし、実際には、組織総体としての技術力の維持・向上が求められている場合も多い。そのような場合、文書化可能な技術・技能も多い一方で、過去の継承だけでなく、継続的な進化がもたらされている。本稿では、そのような技術・技能の継承にスポットをあて、コントロールされたボキャブラリーに基づく構造化された文書としてのオントロジーによる支援の可能性について考察する。

SWS-06 : 「最適ケアプランの作成」

川瀬眞沙子 (法政大学大学院)

【概要】介護保険制度を利用する高齢者やその家族自らがケアプランを作成するシステムを考える。現在ケアマネジャーと呼ばれる専門家によって行われているケアプランの作成に利用者が積極的に参加することによって、より個人に合ったケアプランを得ることが出来るようになる。それには雑な介護保険制度を身近に感じることが出来るシステムが必要である。そこで、この問題を目標計画問題として定式化し、最適化を行うことによってケアプランを作成する。

セッション : 「情報技術のガバナンス」 D 会場 : 7 号館 6F-764)

午前の部 : 10:40 ~ 12:00

ITG-01 : 「リカレント評価モデルによる評価者変分ネットワークの解析」

河村 廣 (神戸大学名誉教授)

【概要】著者は既に、システム設計者の評価軸は一般に“量⇄質”、“マクロ⇄マイクロ”の直交軸からなる位相平面を形成するというリカレント評価モデルを提唱している。位相平面上の任意楕円はリサーチ分析により主軸の正弦波として求められるが、同時にそれを解とする 2 元連立 1 階微分方程式としても定式化され、本式の係数行列は主軸間の変分ネットワークの影響係数に対応し、評価者の評価時の特性を表わすので、自己評価に活用可能となる。

ITG-02 : 「企業の内部統制実務への提案」

大井 正浩 (中央大学)

【概要】監査のための内部統制ではなく、企業が必要な内部統制を充実させて行く具体的なアプローチを提案する。先ず可視化の名の下にチャート、マトリックスの作成に労力を費やす愚を避け、実質的な効果がある活動とは、次の通りである。①内部監査人の関与の下で、業務手続の充実を図る。②実質のある内部通報システムを構築・活用する。③外部監査人に能力があるならば、中間監査で徹底的な指導を行う。

午後の部 I 15:00 ~ 16:20

ITG-03 : 「システム開発プロジェクトの失敗リスク評価のための GAPS²分析」

林 浩一 (ウルシステムズ株式会社)

【概要】システム開発プロジェクトが失敗するリスクを評価するための枠組みとして GAPS 分析の手法を提案する。この手法は、システム開発の失敗要因を Goal : システム化目的に不整合がある、Activity : 業務分析が不足している、Process : 工程管理が適切でない、Skill : 技術スキルが充足されていない、の 4 種類に分け、それぞれの因子について評価する。実際のシステム開発プロジェクトに適用した例を示し、分析の有用性について議論する。

ITG-04 : 「セキュリティ文化と信頼概念についての考察」

杉野 隆 (国士舘大学)

【概要】2005年11月に発表されたセキュリティ文化専門委員会報告書は、日本におけるセキュリティ文化の普及策を提案している。セキュリティ、リスク、組織文化の概念、ルーマンの信頼概念をもとに、OECDガイドライン及び本報告書におけるセキュリティ文化の捉え方を比較分析することによって、背景にある日本と欧米におけるセキュリティの捉え方の違いを明らかにする。

午後の部Ⅱ 16:30 ~ 17:50

ITG-05 : 「アイデンティティ管理」

永島秀雄 (カスタム・テクノロジー株式会社)

【概要】企業や大学等の大組織では、多くの業務ITアプリケーションを使用しています。企業では、正社員、契約社員、協会社社員、関連会社社員、パートタイマー、アルバイト等の多岐に亘る雇用形態が常用になっています。このような様々な方々が業務アプリケーションを活用して企業活動を支えています。反面、セキュリティ管理が煩雑になりがちです。アイデンティティ管理は情報漏洩防止や内部統制(SOX法)の面から必須となります。システム面や法制面から研究発表致します。

ITG-06 : 「IT統制の概念と実務上の課題」

島田祐次 (東京ガス株式会社)

【概要】新会社法及び金融商品取引法によって、企業には内部統制の整備が求められている。内部統制では、IT統制の整備が特に重要な役割を果たすことになる。本報告では、IT統制の概念について検討し、実務上の課題を整理する。さらに、内部統制時代へ対応するためには、ITに関わるリスクのモデル化とそれに対応するコントロールのモデル化、システム監査が重要になる点についても言及する。

セッション : 「人間中心の情報システム」 F会場 : 7号館 7F-774

午前の部 : 10:40 ~ 12:00

HIS-01 : 「ソフトウェア・グリッチの予防」

富永 章 (日本IBM、東京大学大学院)

【概要】ソフトウェアのちょっとした間違い(グリッチ)が重大事故に繋がるリスクが高まっている。とくに組み込みプログラムの複雑化は著しく、グリッチの影響も目立つ。しかし企業の情報システムはさらに複雑な場合が多く、世界中でソフトウェア・グリッチが危険視されている。設計時の誤解や見落としに対しては、適切なテスト・ケースが作られないため、欠陥として残りがちとなる。本稿ではソフトウェア・グリッチの経緯、原因、現状を述べ、今後に向けた予防策を提言する。

HIS-04 : 「情報システム学の枠組み」

中嶋聞多（信州大学 人文学部）

【概要】 昨年の研究大会では、西垣情報学との比較を軸に、情報システム学のあるべき姿を探った。今回は、「人間中心の情報システムを考える」セッションのたたき台として、より具体的な情報システム学の枠組みを提示することによって、議論を深めたい。とくに、情報システム学の理論的背景と取り扱う範囲、さらに実践性をいかに担保するかという点に留意しながら議論をすすめるつもりである。

午後の部 I 15:00 ~ 16:20

HIS-03 : 「業務改革、情報システム活用と意識改革」

甲斐荘正晃（株式会社 KAINOSHO）

【概要】 企業にとってマーケットや顧客ニーズの変化に対応するため、業務改革を継続し情報システムの積極的な活用を図ることが欠かせない。現場で日常業務を担当する社員に、従来の仕事のやり方を捨てて新しい業務プロセスを採用させ、また新たな情報システム機能を活用させるためには、社員の意識も併せて変えていくことが必要となる。本発表では、実際の企業での社員意識改革の取り組みを取り上げ、業務改革、情報システム活用と意識改革の関係について考察する。

HIS-04 : 「情報システム部の新しい役割ーCEO の情報参謀」

松平和也（(株) プライド）

【概要】 情報という日本語は明治初めに生まれた軍事用語であるという。敵情報知を略して情報としたという。山県有朋は情報参謀を陸軍参謀組織に配置して日清日露の戦争に勝利した。太平洋戦争になると作戦参謀が目立ち情報参謀は活躍しなかった。近代ビジネス戦争においても情報システム部門は極めて地味な貢献にとどまっている。現代の CIO は情報参謀として機能しているのだろうか。これからの情報システム部門は情報参謀を育成し競争場裏にある企業の敵情を報知し負けない戦いを繰り返していけるのだろうか。その戦略は？

午後の部 II 16:30 ~ 17:50

HIS-05 : 「情報の評価と価値」

田沼 浩（駒澤大学法学部・法科大学院）

【概要】 「価値のある情報」とは何か。この最も基本的な事項は、ユビキタスネットワーク構築のためには不可欠な命題であり、システムを構築する中でユーザーとベンダーの壁となって現れる問題です。法情報学におけるリサーチとプロファイルに関連して研究した結果から、この命題について一定の解釈を導き出した論文です。【項目】 ①情報は力か？、②情報の対価、③情報の価値と評価（情報の価値、専門家からのアドバイス、情報の比較による評価、裏付けのない情報、情報の評価、情報の目利き）、④情報の共有化と価値。